

援助的サマースクールの研究IX (その7)

A Study on Supportive Summer School IX (7)

中里 裕子

(東京成徳大学大学院)

石崎 一記

(東京成徳大学)

Yuko NAKAZATO (Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)

Kazuki ISHIZAKI (Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究では、2010年度の援助的サマースクールにおける参加者29人のうち3度目の参加である小学校3年生女兒と初参加のスタッフについての様子や行動を整理し、互いの気持ちの変化について考察した。

キーワード：サマースクール、試し行動、笑顔、グループ援助

I. はじめに

東京成徳大学が主催する援助的サマースクールは、「浴びるほどの自然を体験すること」「異年齢集団の中での相互作用を体験すること」「自立的な生活を体験すること」を基本方針としている。今年で9回目を迎え、8月16～21日に実施された。昨年度までは、戸隠で行われていた本スクールだが、今年度は栃木県鹿沼と場所を変えたことで、新しいフィールドから新しい活動が生まれてきた。筆者は、小学校低学年女兒のグループをバイザーとして担当した。本稿では、スタッフと子供たちの関わりに焦点を当て、両者の変容を考察する。(筆者は、4日目は不参加。記述は、1、2、3、5、6日となる。)

II. 事 例

1. 対象 (抽出児・スタッフ)

・小学校3年生 R

[アンケートによる事前調査]

恥ずかしがり屋で頑固。気難しい。慣れるまでに時間がかかる。それまでは、あまりしゃべらず無表情に人を観察するところがあるが、一度安心すると変わる。慎重で怖がり。

Rは、昨年度姉と同室で参加していたが、今年度は1人での参加。同じ小学校の友達と同室。

・スタッフ S 大学1年 初参加

サマスの準備の際、子供とどう向き合ったらよいか不安をもっていることやどんな子なのかなァという期待を筆者に話していた。

2. 期間中の行動 (特記事項)

6日間を両者の関わり方の行動からRの試し行動

とそれに翻弄される2日間を第1期：拒絶・混乱期（1～2日目）、Sに対して自分がどうすればよいのか戸惑いを見せるRと自分がどうしたらよいのか分からなくなったSの二日間を第2期：困惑・苦惱期（3～4日目）、お互いの心がつながり笑顔をかわしあって過ごす二日間を第3期：相互信頼期（5～6日目）の三つの期間に分けてみていく。以下は両者の6日間の距離を図に表したものである。

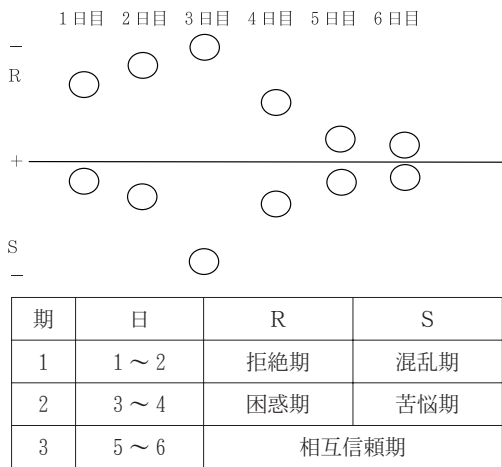


Figure 1 二人の心理的距離に関する概念図

① 第1期：拒絶・混乱期

[開会式]

サマースクール初日、RとスタッフSとの初顔合わせ。

Rは、昨年一緒に参加した姉とともにやってきた。部屋へSが迎え入れる。Rの表情はこわばり緊張していた。Sも笑顔を向けていたが、Rに対する態度は緊張していた。名札を作るとき、SはRに寄り添い話しかけていたが、Rは無表情に作っていた。グループの席に戻ると仲良しの友達と笑顔でおしゃべりを始めた。隣にSはいたが、Sの顔を真正面からみていなかった。ミニレクで、歌を歌ったり、ゲームをしたりしたがRはこわばった表情で参加していた。Sは笑顔を向けるがRは

目を合わせなかった。

[遊び場作り]

宿舎に入ってから、2人と3人のグループに分かれた。Rは同じ学校の3人のグループに入っていた。Rは終始同校同学年のYと一緒に行動を始めた。施設探検ラリー・遊び場づくり。Rは、Yと大きな声を出しながらおしゃべりして行動する。SはいつもRのそばにいた。何度もRに話しかけていたが、Sへ答える場面が見られなかった。わざと後ろ向きに返事したり、無視したりという行動が出てきた。遊び場作りで実生を移し変えるのをRはずっとやっていた。Sはそばで手伝っていた。お互い少し距離を置いていた。

[オセロ]

夜は、オセロがあった。Rは、オセロに自信を持って臨んでいた。筆者とオセロをやったときに自分が勝つと満足していたが小1Kに負けると顔を曇らせた。Sとやってみたらという「いい」といった。

寝る準備をするときなど、他のスタッフが声をかけたり、話しかけたりしたが「いやだ」ということが返ってくるが多かった。Sに時折考え込む様子が出てきた。

[川遊び]

2日目、Sはハイキングの下見で川遊びは途中からの参加となった。Rは、Yとともに大はしゃぎで川遊びを楽しんでいた。

うれしそうにマスを追いかけて、マスが捕まると満面の笑顔があった。下見から戻ってきたSを見つけるとバケツで水掛けをする。1人では行かず、Yに声をかけSに何度も水をかけて大笑いしていた。Sのことを「この人」と呼んでいた。Sはされるままにしていた。何度も何度も水を頭からザーとかけられていたが、にこにこ笑い返していた。Rはそのたびに大笑いしていた。Sから笑顔がなくなった。

[遊び場づくり]

午後の遊び場作り。RはKと一緒にいることが

多くなった。Kにブランコしよう、ハンモックしよう、あれしよう、これしようと声かけて積極的に行動していた。時折答えを返すことはあったが、Sが話しかけても無視したり、離れていったり、わざと顔をそむけたりすることが見られるようになって来た。だが、Sがどこにいるかを確認する姿があった。

Rから出る言葉は否定的なものが多く「無理、できない、やだ」がよく聞かれた。スタッフに対しては、「ばかみたい」など馬鹿にする言葉も出てきた。Sに顔をしかめたり、下を向いたり、ため息をつく様子がみられるようになって来た。Rは特にSに対して無視をしたり、ばかじゃないといったり、この人といったり、声かけに耳をかさないなどきつい態度をとっていた。SはRの行動に翻弄され、どうしたらいいのか分からないと悩んでいることを訴えてきた。「辛い」と涙を流していた。夜のグループカンファレンスで話してみるよう促した。夜までは、少し距離を置いてRを見守っていった。夕食時やレクの時間も離れてRをみるSの姿があった。日記をSには見せようとしない。夜のカンファレンスでスタッフで話し合い、翌日からSはRから少し距離をおいて見るようにし、スタッフ・バイザーみんなでRに関わるようにした。

② 第2期：困惑・苦惱期

[グループ活動]

朝食時魚を残すのについて行ったSにRは「帰れ」という。Rとは別のテーブルで食事。このころから、木登りをはじめたり、遊びの仲間に「入れて」と自分からいう場面が始める。自由遊びの間Sは少し離れてRを見守る。Rの行動の中にSはどこにいるかを探したり、いる場所を確認したりしている様子がみられるようになった。だが、自分から近づくことはなかった。

ピザ作りでは、グループみんなで作業し、また、スタッフの力をかりる場面も出てきた。みんなで

キャーキャーいったり、笑いあったりする中でSはRのとなりにいた。ピザが焼きあがったときに「できた」とうれしそうにSに教えた。少しかわりができたとSから筆者に報告があった。

カレーコンテストでは、優勝したいという願いから二つに分かれていたグループが一致団結してサブリーダーの下一つになった。それぞれができる仕事をはじめ、「わたし、うちやるねえ」「わたし、たまねぎ切る」「わたし、人参切る」などという声もたくさん聞かれた。Rも自分のできる仕事をみつけ小枝拾いに行った。その都度Sも一緒に行き二人で小枝を拾い、はーはー走って戻ってきた。何度も繰り返し小枝拾いがあった。ふたりで笑いながら戻ってくる姿もあった。その後作業の中でも顔を向き合ってSが話しかけ、それに答えるRがいた。カレーが出来上がり、みんなでおいしいと笑顔で食べた。RとSに笑顔が出始めた。

[炭つけ遊び]

(以下Sの記録より) 4日目の朝、Sの問診には答えず、問診のボードを取り上げ自分で記入した。また、Sが頭痛のため、部屋で休むとRに伝えると目を見て深く頷いたとSの記述にあった。

うどん作りでも小枝集めをふたりで行った。

炭つけ遊びを心底Rが嫌がったため、Sとふたりでハンモックですごした。この際、始めてRからSへポツリポツリと話しかけがあり、Sは聞き手になった。

後日、いままでになかったことだとうれしそうにSから筆者に報告があった。

③ 第3期：相互信頼期

[ハイキング]

がっこ山の登り道、Rはひとりで歩く。Sは後ろからついていく。下り道るとき、滑って危険だったため、Sが「一緒に行かないとだめ」と強く言ってしまったと記述がある。Rは、素直に従った。そのときから、Rの態度が変わった。一緒にいて

穏やかになったとSは記述している。Rが「もし、わたしが足を滑らせて落ちたらどうする」と聞くと「絶対にSが助けるから大丈夫」と伝えたら、Rに笑顔があった。その後は階段と一緒に数えながら歩いたようだ。筆者は、宿舎でSとRが笑いながら並んで戻ってくるのを出迎えることができた。Sはうれしそうに「Rに話ができるようになった」と筆者に報告に来た。

[バーベキュー]

グループのみんなはもう当たり前のように自分のできることを仕事分担して動けるようになっていた。ふたつに分かれていたグループもひとつになっていた。Rは火が小さくならないようにうちわで扇いでいた。また、火のそばにいる友達を気遣い飲み物を持ってきたり、うちわで扇いであげたりしていた。Sがいないときは、Sの分をとっておいてあげることもしていた。

[別れの集い]

毎朝の散歩のときも、花火のときも、SのそばにいなかったRが、Sのとなりにいた。RはSの袖口をしっかりつかんでいた。そして、ふたりは並んで話しながら歩いた。火を囲んで隣同士に座った。ふたりの笑顔が向き合っていた。Rは、「また、来年もサマーキャンプに来たい」と大きな声で言った。この日初めてRはSに日記を渡した。「見てもいいよ」といっていた。Sは目を大きく開けてにこにこ受け取った。

[閉会式]

Rの隣にSは笑顔でいた。Rも違和感なくそばにいた。初日の険しいこわばった顔はなかった。にこにこしながら家族に報告するS。最後はグループみんなとスタッフで記念写真を撮った。笑顔いっぱいだった。

Ⅲ. 考 察

(1) 第1期：拒絶・困惑期

『試し行動とそれに対する迷いと困惑』

初日、初対面のその瞬間から、RのSや他のスタッフ、グループの仲間たいしての試し行動が始まった。初めてのスタッフ・友達たいしては、表情をこわばらせていた。Sたいしては、目を合わせることをしなかった。

初日、2日目とSから笑顔をむけても、Rからは笑顔が返ってこない。わざと無視をする。そばを向く。暴言を吐く。言うことを聞かない。そばに近寄らない。他のスタッフと仲良くする。Sがしたことに対して「ばかじゃない」など言う。このようなことがSに向けられた。Rの行動のなかには、Sに対して「ねえ、大丈夫？ わたしのことちゃんと受け止めてくれるの？」「何しても、わたしのこと嫌わない？」というメッセージが詰まっているように感じた。それは、Rが離れていてもSのいる場所を確認したり、目で追っていたことで分かる。Sが記録写真で回っているときもRはSの様子を見ていた。それだけ、自分のことを見てという思いの裏返し行動だったと思われる。

Sは、Rの行動に困惑していた。暴言をいわれても、叱ることができない。避けられても我慢する。ひとつひとつの行動に翻弄されていた。なぜ、しかれないのか。なぜ、我慢するのか。Sの、仲良くなりた、ならなければならないという気持ちや嫌われたくないという気持ち、そして他のスタッフと自分を比べての焦り。Sから笑顔がなくなった。どうしたらいいのか分からない辛さや、なにをしてもRが受け入れてくれない辛さを訴えてきた。Sは夜のカンファレンスでスタッフみんなに辛いことをはなした。少し距離をおいて見守ることになった。でも、いつでもRのことを見ているよというサインをSは送り続けた。RがSのいる場所を確認する姿や様子を見る姿が増した。

自分のとった試し行動に対してのSの困惑振りで、Rも自分ではどうしたらいいのか分からない様子に感じた。Rは、常にSの表情を見ていた。

二人と一緒に活動する時間がSの仕事分担等での二日間少なかった。何か一緒にすることで相互性のある行動が生まれ、目を合わせたり、絆をつくる土台ができるのではないかと思った。同じことを一緒にすることは、言葉がなくても感じあうことができる一つ的手段と思われる。

(2) 第2期：困惑・苦惱期

『笑顔の効力』

この時期Rはグループの友達が別の友達と行動しはじめ、自分の安心できる居場所探しに困惑していた。また、Sが自分に向ける笑顔がなくなってきたこと、自分から距離を置いていることもSの様子を気にかけて目で追うことが多くなったことでわかる。Rは、グループで自分がどんな風に行動したらよいのか、Sは自分のことをどう思っているのかと揺れ動いていたと思われる。

ピザ作りが互いの突破口となった。それは、みんなが狭い空間で一つの目的をもって同じ作業をするためと思われる。言葉が飛び交う、笑顔が交差する。手が触れ合う、笑いがつながる。顔が近づいている中で二人の笑顔が向き合った。目と目が合って言葉が出る。SがRのピザをほめる。Rは微笑む。こんなことの繰り返し起きた。そして、カレー作りへと進んだ。グループの勝ちたいという気持ちがグループの協力を生んだ。Rは、進んで自分のやれる仕事をする。グループの役に立とうと自分のできることを考えるその気持ちに寄り添い、同じことをして手伝うS。同じことをしたことで二人の気持ちが近づいていたように感じた。小枝を森の中へふたりで拾いに行く。はーはー言いながらにこにこして戻ってくる二人。小枝を受け取り、グループの子から「ありがとう。助かる」の声。「もう一回行って来る」のRの声。その声には、はりがあった。走り出す二人。わーわー

なんか言いながら走っている。Rは、自分のしたことがグループのみんなに役立っていること、認めてもらえたことを笑顔で表現した。「わたしも、このグループの仲間だね」という言葉に筆者は感じた。そのときいつも一緒にそばにいて、同じことをしてしてくれたのがSだった。このとき、RはSがそばにいてくれること、同じことを一緒にすることをSが共有してくれことに喜び笑顔が戻っていたと思われる。互いに向け合う笑顔の中に二人に伝わる言葉があったのではないだろうか。そばに行くことが辛く、怖がっていたSがRから距離をおいて関わることを諦めかけた時期に、笑顔が生まれる活動があることの大切さを感じた。その後、炭付け遊びのハンモックで二人でゆったり過ごした時間。嫌なことから逃げ出してひとりになったときにそばにいてくれたSに対して心を開き始めたR。ハイキングで自分をしかってくれたS。わがままを言っていることをきちんとだめと伝えてくれた。私のことを思ってくれていると感じた一言になったと思われる。RがSに向けた笑顔には、「もう大丈夫。Sはちゃんと受け止めてくれる」なのではないだろうか。Rの試し行動はなくなり、Sと一緒に同じ空間を過ごすようになった。二人の笑顔が繋がった。サマースクールの子供たちの笑顔の中には、スタッフに伝えたいものがぎっしりつまっている。

「ねっ、できたでしょ」「ねっ、みてた?」「わぁ、びっくり」「あっ、みていてくれたんだね」「そばに、いたんだね」「あー、たのしかった」「ねえ、ねえ……」とこんな風に。笑顔と笑顔が互いに向き合ったとき、安心し、心がつながるのだと考える。互いの笑顔が安心感をつなぎ、RにとってSは安全基地になったと思われる。

(3) 第3期：相互信頼期

『グループ援助』

2日目のグループカンファレンスでSからRの試し行動からの困惑や辛さの訴えがあった。グルー

プみんなでSの辛さを共有した。次の日からグループみんなでRを見ていくことになった。その過程を説明する。

・1日目カンファレンス

スタッフからは、それぞれのバディの様子やバディが困っていたことなどの報告があった。また、スタッフが係分担任でいなかったときなどのバディの様子が情報交換された。バイザーAからは、困っていることがあったら、みんなに話して共有していこう、また無理しないで疲れたときは声をかけ合って休もうとアドバイスがあった。Sからは、Rはまだグループに溶け込んでいないことの報告があった。

・2日目カンファレンス

Sからの「辛い」との訴えがあった。Rが無視したり、暴言を言ったり、あっちに行つてと言ったり、わざと言うことをきかなかつたりとSに対してのみの行動に翻弄され、自分がどうしたらいいのか分からないこと、強い態度にでられないこと、ひどいことを言われてもその場を笑っていないこと、苦しいと泣きながら話した。グループのスタッフもRのSに対する態度に気づいていた。スタッフは、RがSの気づいていないところでSのことを意識してSを探していたことなどを伝えた。かなりSが疲れてきているようなので次の日から少し距離を置いてRを見守っていくことにみんなで相談した。また、他のスタッフ・バイザーみんなで関わっていくことにした。カンファレンス終了後、スタッフみんなで部屋に集まり他のスタッフの困っていることやつらいことについてもみんなで共有した。何度かサマーキャンプを体験しているスタッフからは自分の同じような体験談が話され、他のスタッフもみんな同じなんだとSは少し落ち着いた。Sは他のスタッフはバディと仲良くやっているのに自分はできていないことも、自分に返して苦しんでいた。苦しい気持ちをもみんなで共有することが大切と感じた。

グループ援助ではじめたことは、Sは少し距離

をおいてRを見守ること。スタッフはできるだけRに声をかけスタッフみんなでRを見ていくこと。バイザーは、グループ全体の中でRをみていくこと。

スタッフとバイザーはRとSのつなぎ役になれるようにした。RはSを求めている。SもRを求めている。その心と心をつなぐためにグループみんなで動いた。スタッフはスタッフ同士で常にRの情報交換をし、バイザー同士も状況を共有し合っただけで他の子の様子とは照らし合わせながらグループ全体を見守った。

その間、Sは距離をおいてRを見守ることで冷静にRの様子や心の動きをみれるようになった。ピザ作りやカレー作りのときRの言い出したいけど言えないでいる様子やグループのみんなに受け入れてもらったと時の喜び、ひとりになったときの寂しさをともに感じるできるようになった。SにRを「そのまま」受け止める不安がなくなっていった。そしてハイキングで「一緒に行かないとだめ」の強い言葉。SからRのことを強く思っている思いがあふれだしたのだろう。そのときのことをSは、「その瞬間からRもSも変わった気がする。一緒にいて穏やかになった」と記述している。Rもその心を受け止め、求めていた心と心がつながり、お互いに自分のことを思っていると感じ、信じあうことができたと考える。

グループの子供たちにも変化が出てきた。それは、どのスタッフにもやさしい態度で対応するようになったことだ。もちろん、甘えるのはバディだが、バディが係りでいないときは、ちゃんと我慢してまてるし、話せば素直に聞き分けてくれる。他のスタッフがいなかったことを気遣ったり、忙しそうにしていると「〇〇たべた？」ときいていた。

始め1対1のつながりだったものが、1対7に広がっていた。苦戦している人をみんなで助ける。みんなで連携を取り合っただけで他の子供たちにも小さな波となって伝わったものとする。

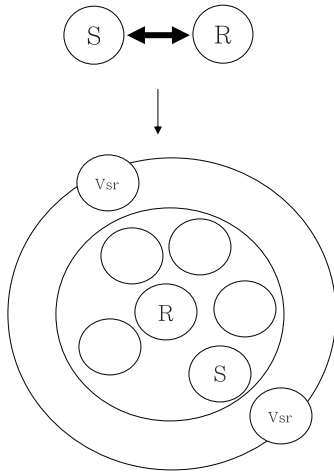


Figure 2 関係の変化に関する概念図

参考文献

ヘネシー・澄子著 2010 『子を愛せない母 母を拒否する子』 学研
 石隈利紀・田村節子 2008 『チーム援助入門』 図書文化
 工藤力 1999 『しぐさと表情の心理分析』 福村出版

IV. あとがき

電車の中で小さな女の子が私に笑顔に向けた。無防備な笑顔。こちらも心空っぽにして笑顔で返す。心にぽっと灯がともる。笑顔の中にあるものはなんだろう。笑顔の中にいろいろな心や言葉が詰まっている。そんなことを思ったとき、RとSの6日間を考えた。近づきたいと思っている心と心があるのに互いに近づけない。近づけないものは、何なのか。それは、自分を通して相手を見るのではなく、相手をそのままを受け止めることなのだ。今回のサマスクで感じた。Sは第1期に、Rを見ていたのではなく、Rを通して自分を見ていたと考える。Rの行動を自分の中で考え、自分で判断して、自分に返して、悩んでいた。そこにRの気持ちになかった。グループ援助で冷静にRを見られるようになったとき、その行動と心の動きが見えてきた。Rの「そのまま」が見えてきたのだと考える。Rを離れてみているSの表情は穏やかになって行った。筆者は子供を離れて見守る母親の顔に近いと感じた。

心から溢れ出す笑顔は、そんな心と心をつなぐことができる大切な言葉だと感じた。